

市民力を育む社会学級の仕組み

高橋 満*
朴 賢淑**
中野 弘樹***

事例としてとりあげるのは、宮城県仙台市の社会学級である。全国的に見ても、いま、この社会学級をもっている自治体はほとんどない。社会教育法の規程にあるにもかかわらず、多くの自治体では消滅している。にもかかわらず本論文で社会学級を事例としてとりあげるのは、この制度仕組みのなかで学習した市民たちが仙台市の行政の審議会委員として政策形成に参加したり、NPOなど市民運動や社会的企業の中心的な担い手になっているという事実である。つまり、社会学級の制度は、市民の主体的参加や政策決定への参加する人材を育てる役割を果たしている。

なぜ、社会学級は、活動する女性たちを育むことができたのか。このプロセスの解明が本論文の課題である。社会学級は、こうした仕組みをもっている。では、その仕組みとはどのようなものなのか。それは、どのような学習内容、学習方法を含む仕組みなのかを明らかにしたい。

キーワード：社会学級、女性の学習、エンパワーメント、共同活動、民主主義

はじめに

社会教育における女性の学習研究について、槇石多希子(槇石 2004)が研究史を適切に総括している。それを要約すれば、「1970年代以降の成人女性の教育研究は、行政の展開する『女性問題学習』を研究の中心においておこなわれてきた」(槇石 2005: 25)、という。これに対して、槇石たちは、「社会的活動への参加と女性の学習との関連をとらえる」(槇石 2005: 25)必要性を強調し、新しい労働をめぐるエージェンシーとしての女性たちの活動と学習との関連を実証的・理論的に論述してきた。本研究は、こうした問題意識を引き継ぎつつ、ここでは、とりわけ、女性たちが学習をとおして、いかに自己変革をとげていくのか。趣味的な学習からはじまりつつも、その学びのプロセスをとおして、いかにエージェンシーとして社会的活動に参加していくようになるのか。これらのプロセスをミクロに解明しようとする研究である。

事例としてとりあげるのは、宮城県仙台市の社会学級である。全国的に見ても、いま、この社会

*教育学研究科 教授
**教育学研究科 助教
***宮城県松島高等学校 教諭

学級をもっている自治体はほとんどない。社会教育法の規程にあるにもかかわらず、多くの自治体では消滅している。にもかかわらず、なぜ、社会学級を紹介するのか。結論的になるが、ここで社会学級を事例としてとりあげるのは、この制度仕組みのなかで学習した市民たちが仙台市の行政の審議会委員として政策形成に参加したり、NPO など市民運動や社会的企業の中心的な担い手になっているという事実である。つまり、社会学級の制度は、市民の主体的参加や政策決定へ参加する人材を育てる役割を果たしている。

なぜ、社会学級は、活動する女性たちを育むことができたのか。このプロセスの解明が本論文の課題である。わたくしの理解では社会教育の目的は、民主主義、社会正義を実現する市民力を育むことにあるが、社会学級は、こうした仕組みをもっている。では、その仕組みとはどのようなものなのか。それは、どのような学習内容、学習方法を含む仕組みなのだろうか¹。

1. 教育実践の目的とは何か—民主主義を学ぶ

1) 活性化とは何か

周知のように、近年、生涯学習の領域でも事業評価を実施して、行政としての説明責任を果たすべきだということが強調されている。公的な金を使うわけであるから、市民に成果を説明することは必要なことであろう。しかし、そこでは、成果とは効率性のことであり、効果を数値的につかむために、費用に対して参加者がどれだけあったのか、費用対効果という指標が重視される。あるいは、学習者の満足度が指標として重要になる。こうした視点から見ると、生涯学習の活性化とは、多様な講座が市民に対して用意され、より多くの市民が講座に参加していることとしてとらえられよう。

こうした考え方は、生涯学習における消費者主義であり、これに対して、すでにいくつかの批判をしてきた(高橋 2009, Biesta 2010)。

これは大切でないとはいえないが、それは成果を見る一つの指標でしかない。こうした受講者数や満足度にだけ注目する主張は、生涯学習政策の皮相な理解によって助長されている。生涯学習政策では、学習者のニーズが大切であり、学習者の選択が大切だと強調されてきた。わたくしの言葉でいえば、ニーズの神格化である。それは、教育の目的・価値を問うことは、一つのイデオロギーであり、適切ではないという批判に結びつく。つまり、教育をとおして特定の価値を押しつけるという主張である。したがって、学習はあっても、教育の役割は否定され、社会教育職員の主要な役割は、コーディネーターであり、ファシリテーターと理解されることになる。「教育」から「学習」への転換は、単なる用語法の問題にとどまらない意味をもっている(Biesta 2010, 高橋 2003, 2011)。

そもそも教育的実践において、その価値を問うことなく実践を展開することはできるのであろうか。職員の専門性は、コーディネーター、ファシリテーターということだけなのだろうか。人びとが選択の機会をもつことは確かに重要であろう。しかし、それは、既にある商品の選択の問題でしかない。そもそも教育は未来に対するわたくしたちの価値的働きかけである。したがって、わたくしたちは、その実践がどのような目的をもつのかという議論を欠かすわけにはいかない。

2) 教育の目的としての民主主義

では、どのような目的・価値を選択すべきなのだろうか。わたくしは、教育の目的・価値は、その実践をとおして民主主義と社会正義を実現することであると主張してきた。ここでむつかしいのは、この実践のエージェントはどうしたら育っていくのかとことであろう。ここに公教育の矛盾がある。すなわち、「わたくしたちは市民社会で行為する市民を必要とするが、市民となるためにいかに学ぶのか、何を学ぶのかを決定するのは国家である」からである²。だからこそ、日本の社会教育制度は、社会教育法で「環境醸成」に行政の役割を限定してきたわけである。国家に対する社会教育の自由の確保という視点が大切な理由である。

これを別の面から見れば、市民の自己教育・相互教育こそが社会教育の本質だといえるだろう。市民たちが自ら主体的に組織した豊かな学びの機会があり、この学びの機会が花開くように行政には学習の基盤を整備する役割を果たすことが求められる。しかも、その成果として、民主主義や社会正義を実現しようという意志と力量をもつ市民が育つことが展望される必要がある。民主主義を学ぶとは、教科書で民主主義の知識や意味を学ぶ、政治システムにおける権利と義務を学ぶことではない。

教育の実践レベルで考えるには、ここで民主主義をもう少し具体的にしておく必要がある。語源でもあるデモクラティアとは、文字通り「民衆」の「権力」を意味する。要するに、民衆の自己支配ないし自己統治という意味である。しかし、投票により代表を選出し統治するシステム、つまり、間接民主主義ではない。投票に行く市民を育てることではもちろんなく、より直接的なもの、つまり、「共同的に考え、共同的に疑い、共同的に探求する」こと、声をあげること、討議すること、さらに付け加えれば、こうした諸階梯をたどりつつ「共同的に行為する」こととして民主主義を理解すべきである。つまり、熟議民主主義として理解されねばならない。Biestaにいわせれば、民主的な実践への参加のなかで、民主的な主体が育まれる可能性があるのである (Biesta 2011)。

したがって、社会教育の活性化とは、受講者たちの数の問題にもまして、自らの学習を「共同的に考え、共同的に疑い、共同的に探求」すること、「共同的に行為する」人たちが育つこととして理解しなければならない。こうした民主主義の理解から見て、社会学級は、どのような意義をもっているのだろうか。

2. 社会学級の歴史と制度

1) 社会学級の歴史的展開

まず、社会学級が、どのような制度として整備され、展開してきたのかを整理しておきたい。

現在、この社会学級は、仙台市をはじめ、いくつかの自治体だけに残っているが、歴史的に見ると、日本全国に設置されていた。なぜなら、社会教育法の第44条、第48条の規程にもとづいて整備された制度だからである。以下の条文がある。

第44条 学校の管理機関は、学校教育上支障がないと認める限り、その管理する学校の施設を

社会教育のために利用に供するように努めなければならない。

第48条 …教育委員会は、…公立学校に対し、その教育組織及び学校の施設の状況に応じ、文化講座、専門講座、夏期講座、社会学級講座等学校施設の利用による社会教育のための講座の開設を求めることができる。略

3 社会学級講座は、成人の一般的教養に関し、小学校又は中学校において開設する。

4 第一項の規定する講座を担当する講師の報酬その他必要な経費は、予算の範囲内において、国又は地方公共団体が負担する。

この規程に見るように、戦後の社会教育の出発点においては、施設の開放だけではなく、各種成人教育講座の開設が学校に求められていたことがわかる。現在も規程としては残っているが、小中学校でこうした成人教育講座が行われている例は多くない。ちなみに、仙台市の社会学級の歴史を整理してみよう。

表1 仙台市の社会学級の歴史展開

1949年	社会教育法制定。その第44条・第48条にもとづき、学校開放による成人対象の「学級」として仙台市内の小中学校に16校開校。
1955年	仙台市社会学級研究会が発足
1960年	中学校に開設されていた「学級」を、小学校に統合。小学区に開設する方針。
1981年	養護学校(障害児の学校)に社会学級を開設
1988年	仙台市、泉市、宮城町、秋保町の合併により、それらの区にも社会学級開設。
2011年	東日本大震災により被災地域6校が休講となる。社会学級120校(126校中)。

この歴史的展開では、2つの特徴をもっていたことを確認しておきたいと思う。第1に、公民館など社会教育施設がまだ未整備な段階にあって、学校が社会教育施設として重要な役割を期待されていたということ、第2に、この社会教育法の制定時点では、自由主義の理念にたって法律、制度、政策が展開されていたということである。ここで自由主義の理念というのは、行政の関与は補完的なものであり、市民の自主的、主体的な学習を大切にすることである。したがって、行政の役割を「環境醸成」に求めるわけである。

こうした理念は、社会学級の具体的な制度や運営方法に大きな影響を与えたと思われる。くわしくは、すぐあとで見ると、市民の参加と決定により「学級」は運営されることが基本となっている。

その後、市民にとっての学習機会の提供という意味では、仙台市は、中学校区を基本に公民館を整備する方針をとり、現在65の公民館の設置をみているが、当時、いまだ公民館の整備がすすんでいないなかで、小学校を拠点とした市民の学びの場がつけられた意義は大きい。考えてもわかるように、どの地区でも小学校に社会学級が設置されることによって、一挙に各自治体は社会教育的施設としての基盤を広げたことを意味するからである。

2) 社会学級の制度

次に、仙台市における社会学級の制度の概要を、①だれが、どのように開設するのか。②だれが、どのように運営するのか。③運営の組織について、紹介したい。

① 開設方法

まず、どのように学級を開設するのかを見ておく。大切なことは、社会学級の開設の主体はあくまで学校だということである。仙台市内のすべての小学校に開設することを基本にしている。具体的には、学校長が「社会学級開設委員会」の委員長となり、「学習計画書」「運営委員名簿」などを教育委員会に提出して、「委託契約書」を締結する。この契約は毎年新たに締結し直す。期間は1年である。委託事業が終了した時点で開設委員長(校長)が仙台市に「実施報告書」「概算払清算書」を提出する。委託料は変動しているが、2014年度は46,000円が支払われていることがわかる。予算には、この委託料と学級生から徴収する会費が加わる。市内の小学校を見ると、46000円から200000円の予算額になっている。ここから講座等の講師謝礼や資料代等が必要経費として支出される。

学級生になるのは学校に在籍する保護者が多いが、保護者だけではなく学区に居住する住民が自由に参加することができる制度となっている。委託契約は毎年新たにだされるので、したがって、形式的には、毎年新たに開設され学級生たちが募集されてきたことになる。

② 学級運営

では、学級はどのように運営されているだろうか。開設委員長である学校長は社会学級主事として委嘱され、学級の責任者として運営に対して助言・指導する役割をもつ。このほか、相談役として、学級担当教諭が置かれる学校もある。学校開放事業なので、学校施設、学校の人材の役割が大きいといえよう。

学校の教師たちは主事や担当として運営を補佐するが、しかし、運営の中心は、市民たち学級生が担っている。つまり、学級生により組織される運営委員会が自主的に運営する仕組みをもっていることが大切な点である。学級生から運営委員が選出され、彼・彼女たちが運営委員会を組織している。この会が自主運営の主体となっている。

運営委員たちには、学級生の要望や状況、地域の特色や課題などを考えながら、学習プログラムの企画・運営、予算計画などを立案する役割が求められている。講座等の準備・運営、実施後の評価なども学級生の協力をえながら、運営委員が中心となって自主的に行う仕組みである。

③ 単位学級と社会学級研究会

もう一つ社会学級の大切な特徴として、重層的な組織構成をつくっていることがあげられよう。学級生たちによる自己統治の仕組みである。社会学級は、単位学級、ブロック会、社会学級研究会という3つの段階の組織編制をもっている。

第1に、単位学級は、各小学校で開設される学級で、校長の下、学級委員長、副委員長ほか役員た

ちを中心に運営委員会で運営されている。この運営委員は持ち回りで選出されている。もちろん、断ることもできるが、できるだけ責任を分担する、共有することが目指されている。

第2に、各学級の運営委員長が仙台市内の5つの行政区ごとにブロック会をつくっている。ブロック会では、区全体の学級生が集って学習会と情報交換が行われる。

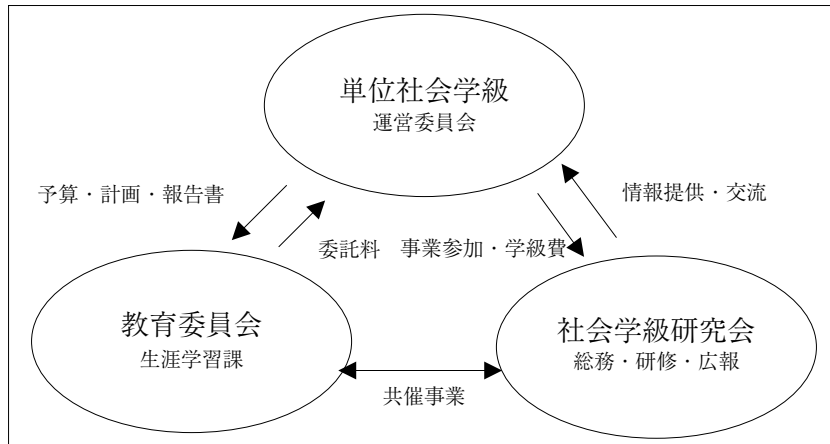


図1 社会学級の組織関係

第3に、市内全体の学級から選出された委員長によって市内全体で社会学級研究会がつくられている。研究会には、学級の運営についての情報交換・発信や、学級を運営する上での支援を行うことが求められている。この研究会には、総務、研修、広報という3つの専門委員会が置かれ、分担して研究大会、社会学級セミナー、ブロック会、社会学級の手引きの発行などの事業を実施している。各学級の運営委員長は、理事もしくは専門委員として各専門委員会に所属し活動している。

各学級、ブロック、研究会の役員も、できるだけ持ちまわりで選出するようにしており、だれもが運営に参加できることをめざしている。したがって、研究会の役員も、任期は2年であるが、必ず改選されるのが原則である。

まとめ

以上から、社会学級の制度・運営の特徴をまとめておこう。

第1に、社会教育法の規程にあるように、社会学級の開設・実施の責任は学校（学校長）にある。単なる施設の開放というにとどまらず、学校が成人教育事業として社会学級を運営するということである。

第2に、しかし、学級の実際の運営にあたっては学級生である市民たちが中心となって実施しているということも明らかであろう。仙台市内全体の運営をより円滑に、かつ、適切に組織することができるように、単位学級の運営を自らが支援するシステムとして、とくに社会学級研究会が大きな役割を果たしていることもわかる。

第3に、ただ、教育行政との関係についても見ておく必要がある。もちろん、何を学ぶのか、いかに学ぶのか、ということを決定するのは学級運営委員会の権限ではあるが、委託契約書には、学級のガイドラインが設けられている。また、学級では年間の共通テーマをもっているが、この設定にあたっては、研究会と協議しつつ決定している。

第4に、社会学級は、市民が居住する身近な施設で学習する機会を提供する制度であるが、それは市民たちにとって単に学ぶ機会というだけではない。市民たちが学級の運営に参加し、かつ、そこでは社会教育職員と同じように、「学習を組織する者」としての役割を果たすことが求められている。だからこそ、学習の質を高めるとともに、学習の組織者としての力量を高める装置として、ブロック会、研究会等の組織編成をつくっているのである。それは、学習の場であり、共同実践への参加の場でもある。

では、社会学級は、どのような学習を行ってきたのだろうか。そして、社会学級への参加は、市民性を育む上でどのような意義があるのだろうか。

3. 仙台市社会学級で実施した学習内容

本節では、「仙台市社会学級研究会記録」を手掛かりにして、社会学級が行ってきた学習内容について確認する。前記のように、社会学級は、地域住民の身近な学びの場としての機能を持っており、地域住民との交流の場でもある。社会学級では、年間の学習内容を学級生同士が話し合いをとおして講座の企画や運営を行っている。一方、こうした地域住民の学びの場である社会学級の学級生がどういった学習を行ってきたのかを確認する。したがって、ここでは、学級生の学習の場である、①社会学級研究大会、②社会学級セミナー、③ブロック会を中心に取り上げ、学習内容について検討する。

まず、社会学級研究大会(以下、研究大会)は、年1回開催されており、学級生を会員として、社会学級同士の連絡提携をとおして、学びのネットワークづくりを目指している。また、同会をとおして学級生が学級運営や学級生共通の学習課題について話し合いの場でもある。同会は1955年に結成されてものであり、学習会の企画や広報活動をとおして、各単位学級の運営に関する情報提供や学習機会をもうけるなど交流の場を提供している。ここで、運営においては、各学級の運営委員長と選出された役員により自主的に行っている。

次に、社会学級セミナー(以下、セミナー)は、学級生のニーズに合わせたテーマ設定して学級生同士が話し合いによる研修会である。なお、名称においては、1969年～1991年までは、「問題別研究会」、1992年～1997年までは、「問題別学習会」、1998年～現在は、「社会学級セミナー」へ名称が変更された。

最後に、ブロック会は、各単位学級を5つの区単位で分かれて学習会を行っており、その区分された各ブロックの運営委員長、副委員長、運営委員がブロック毎日集まり、行う会である。同会をとおして、学級の学習内容や運営などについて情報交換を行い、学級間の交流を図るとともに、単位学級の活性化を目指している。また、研究会への要望や意見、事業への感想を話し合う場でもある。

ブロック会は、前期と後期に分かれて年2回行われている。

なお、学級生は、上述の学習会をととして、社会的課題を学ぶことができる。具体的な学習内容においては、環境、福祉、教育、社会問題、地域課題などであり、教室中に留まらず、地域での活動参加も積極的にすすめられており、学習活動への取り組みは、すべて学級生が主体になって行われている。

さて、上記の3つの会では、どのような学習が行われているかについては、仙台市社会研究会記録のうち、1980年(26回)から2013年(59回)までの記録を学習テーマに基づいて4つの時期に分けて整理する。

第1期：1980～1990年

この時期は、女性自身や「男女役割分担」に関するものが主な学習テーマとして取り上げられている。たとえば、**研究大会**で取り上げられたテーマをみると、「明日に向かって一婦人の社会参加をすすめる」(1980)、「家庭の役割と責任—いま立ちどまって考える」(1982)、「女と男のいる風景へ—国連婦人の10年、最終年をむかえて」(1985)、「確立しよう！女と男のパートナーシップ」(1987)、「女の自立、男の不安」(1989)、「男と女の新しい関係」(1990)である。さらに、**セミナー**で取り組んだ学習テーマをみると、「生涯学習—女性が学ぶとは」(1980)、「家庭科の男女共修を考える」「女性の再就職」「婦人差別撤廃条約の批准に向けて」(1981)、「社会学級と託児」「社会参加と主婦意識」「女性性と職業」1986、「性別役割をこえて—ささえあう人生を」(1989)などである。

一方、この時期の**ブロック会**では、運営委員長、副委員長、運営委員などの学級運営に関する情報交換が主な内容になっている。

第2期：1991～1998年

女性自身の生き方の充実や家族を意識したテーマが主流である。**研究大会**で取り上げられたテーマをみると、「いま、人として美しく生きるとは」「福祉・交流」(1992)「日本は本当に豊かなの？」(1993)、「ともに生きる、とは何か」(1995)「個の変革が社会をかえる—ひとりひとりのエンパワーメント」(1996)、「ともに創る社会を求めて—心の窓をあけよう」などである。一方、**セミナー**では、環境、福祉、自分をテーマとして「食の安全性」「安全な食生活を考える」「老いを見つめて」「しあわせな老後」、「自分育て—生涯学習時代にする—」「自分を見つめなおして—輝いて生きるために—」「新しい自分と出会うために」「自分らしく生きることは—終(つい)のすみかをさがして—」「家庭からみた教育について—心の教育—」(1997～1998)などである。次に、**ブロック会**では、学級の運営に関するもので。運営委員の体験発表やリーダーとしてどうあるべきか、が上げられている。

第3期：1999年～2010年

この時期は、地域を視野に入れた学習テーマや、社会問題が主流になっている。**研究大会**では、「人が大好き！元気なまちが好き！」(1999)、「地域をつくる学び」(2004)、「家族の絆・地域の絆」(2008)、「

「これから求められる地域の貢献力・地域の共生力―地域共生科’がめざすもの―」(2010)などである。**セミナー**では、「人にやさしい街づくり(バスによる施設見学)」(1999),「すぐに役立つ―企画力養成のための演習と実践」(2000),「ともに創る社会へ―地域とのネットワークづくり―:それってゴミですか―循環型社会のために―」「異世帯交流の方法を学ぶ―地域の中で活動していくために―」「虐待を考える―今,子どもが危ない」(2001),「地域の子どもを育てましょう」「地域の防災教育」(2003)「地域で楽しく安心して暮らせるために」(2006),「裁判員制度について学ぶ―あなたが裁判に選ばれたら」「地域で考える危機管理―できることから始めよう―」「より信頼できるまちづくりのために」(2008)「宮城県地震がやってきた!―さああなたは どうする?」「危ないケータイ楽しいケータイ:―ケータイの見えないワナー」「女性の視点からみる災害復興」「新型インフルエンザを考える―いざという時にあわてないように」(2009),「安心して暮らすために―私たちにできるセーフティネット―」「地域減災のためのコミュニケーション術」「水の捜索人―カレライスを学ぶ 地域温暖化!―」「私たちの知らない本当の真実とは―安全に暮らすために私たちができること―」「ついに震災がやってきた!―なんとかなるさ, と思いませんか?」などである。次に,**ブロック会**では,社会学級のあり方や社会学級と地域との関わりについて,話し合いを行っている。具体的には,「講座の計画や運営方法」,「委員長(運営委員)としての研究会との関わり」,「魅力ある学級運営について」,「宮城野ブロックの新しい試みについて」,「社会学級を楽しくするためのコミュニケーションづくり」(2001),「社会学級と学校とのよい関係をつくるために」,「地域の大人として社会学級でできること」,「学校から見た社会学級―地域や子どもとのつながり」,「社会学級と学校と地域のつながりについて」(2003)「社会学級のこれから―よりよい運営を目指して」,「社会学級の輪を広めよう―学校と地域との関わり方」,「今,必要な社会学級とは?」(2008)「充実した社会学級の運営するために―地域とのつながりを広げよう―」「元気な社会学級・明るい社会学級」「笑顔で社会学級を続けて行くために―『まなぶ』喜びを再確認してみませんか―」「ひろげよう社会学級の和・話・環―」(2010)などである。

第4期:2011年～2013年

この時期は,東日本大震災があった年であり,したがって震災に関する学習テーマが中心となっている。**研究大会**では,「みんな生きている―音楽家・陶芸家」「あなたの心は元気ですか」(2011),「震災後の社会をつくる―おとなの学び」,「地域の未来を創造する」(2012),「までのい力・飯舘村の取り組みから学ぶ」,「10年先も元気にいるために,伝えたい大切なもの」(2013)などである。次に,**セミナー**では,「本当に大切なものとの向き合い方」,「食品の安全性を考える―安心して毎日の食事をするために―」「大地震!あの日,今,そしてこれから―」「心のケア―今,私たちにできること―」(2011)である。次に,**セミナー**では,「本当に大切なものとの向き合い方」,「食品の安全性を考える―安心して毎日の食事をするために―」「大地震!あの日,今,そしてこれから―」「心のケア―今,私たちにできること―」(2012)「乗り物での省・畜・創―エネルギーを考える」,「震災を教訓に!―地域災害のための新たな心構え」(2013)である。次に,**ブロック会**では,「社会学級生として これ

からできること—震災を経験して」「社会学級が行う震災復旧とは？—地域とつながりを広げよう」
 「笑顔が生まれる社会学級をめざして震災の中から見えた地域社会の様子—社会福祉協議会の活動の中から」「ゆたかな人間性や社会性をはぐくむために—ひと・こと・もの～」（2011）、「ご存じですか？市民センター—その実像と可能性」 「笑顔とコミュニケーションのある社会学級」 「学校や地域をステージに楽しい活動を社会学級をアピールしよう！」「充実した運営をするために」（2012）、「学びの楽しさを伝えるためにできること—生涯学習社会の中で社会学級」 「折立小 震災から3年」 「みんなで広げる〇（わ）地域の話・輪・笑！」「蒲町小学校 社会学級の現在」 「地域の資源を見直し活かす」 「地域とともに歩む学校づくり」（2013）などである。

以上、社会学級で行ってきた学習を4つの時期に分けて整理した。その結果、社会学級では、女性、家庭、地域、社会などを視野に入れたテーマを中心とした学習が行われていた。

では、社会学級では、どのような学びの場を提供しているだろうか。そして、社会学級への参加は、市民性を育む上でどのような意義があるのだろうか。

4. 社会学級の学びの方法と構造

社会学級は、その運営のために重層的な組織構成をもつが、大切なことは、この単位学級、ブロック会、社会学級研究会という組織構成が、市民にとって質の異なる、多様性ある学びの機会を提供していることである。これはノンフォーマルな学習機会であるが、全市的な学級運営自体が、その活動への参加をとおしたインフォーマルな学習機会となっている。この両面で、学習の構造を見てみよう。

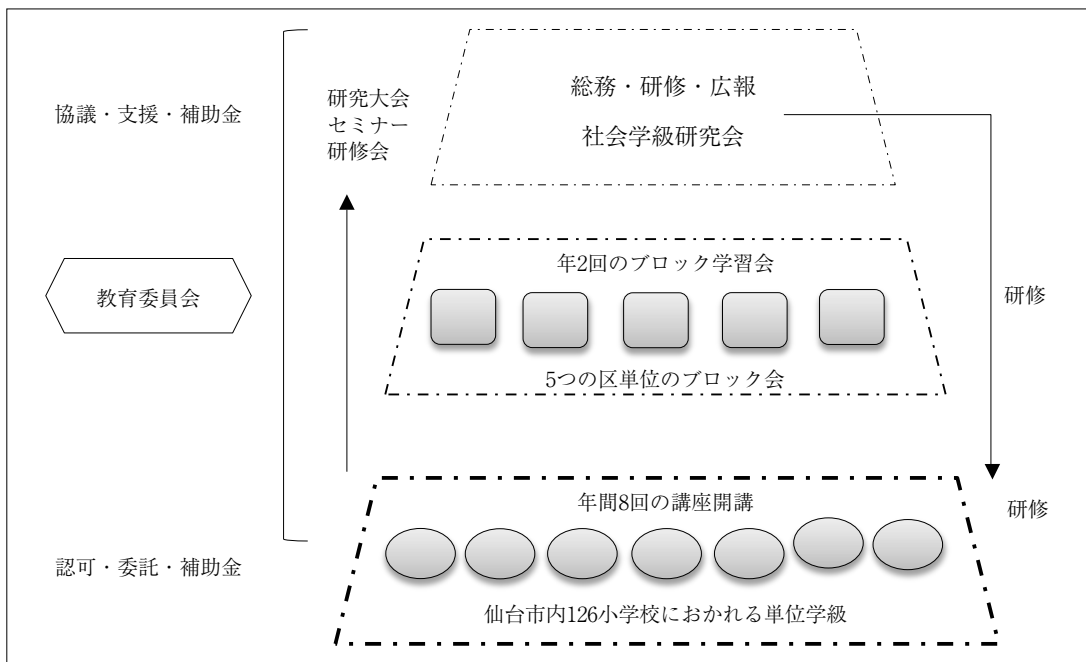


図2 社会学級の組織と学習の構造

1) ノンフォーマルな学習機会

第1に、単位学級の学習機会がある。各学級では、運営委員が中心になって年間の学習計画を作成し、これにもとづき事業を実施する。この際、年間8回以上の講座を開設することが委託条件となっている。学習課題として、市は、環境、福祉、教育、防災、社会問題などの現代的課題に関係する内容を求めているが、市民のニーズを重視して、身近で、趣味的な内容の講座となっている。小学校の教室内の講座だけでなく、市民センターや博物館などと連携した学校外を会場に講座を実施することもある。

具体的な講座内容を見ると、料理や健康に関係する趣味的な内容や、身近な生活に役立つ内容が中心となっている。研究会では、学習内容が趣味的なものにだけ偏らないように、より社会性や公共性のあるテーマに取り組むように働きかけている。

第2に、ブロック会では、行政区ごとに学級生が集まって年2回大きな研修会を実施している。2013年度の内容をみると、震災後なので、防災・減災、地域づくり、エネルギー問題などが取り上げられている。つまり、より社会性のある学習課題に取り組んでいることがわかる。講演を聴いた後、「タイムテーブル」といって対話する時間を持ち、それを共有する方法がとられている。この会についても、各ブロックを構成する研修委員が企画・運営している。

第3に、社会学級研究会が企画・運営する学習機会がある。この学習機会もいくつかに分けることができる。もっとも大きな企画は社会学級研究大会である。これは総務委員会が担当して、各年度の研究テーマを決めて企画・運営している。ここ数年は、「ともに育む社会」というテーマを掲げ、学習をとおしていかに社会参加をつくるのかということを議論している。研修委員会が企画・運営するのは社会学セミナーである。一ヶ月に4回の連続講座をもち、これも特定のテーマについて学ぶことになる。近年のテーマは、防災、地域づくり、食や環境・エネルギーなどの問題についての学習テーマが多い。

これは、1998年前には問題別研究会としてもたれていたものである。その当時は、自然環境問題、女性の社会参加、家族のあり方、高齢社会と福祉など学習テーマを設定し、運営委員長がそれらのグループに所属して、年間をとおして調査や学習を重ねて研究に取り組む形態であったようである。つまり、共同学習と共同実践の機会であった。継続的で、調査などを含む学習方法は、力量を育む上では有効であるが、それを継続することはなかなかむつかしいようである。

2) 学習を組織するものとしての学び

このほか、研究会は学級の運営について情報を交換する役割を果たすが、運営委員は学習プログラムの企画・運営を担うので、その力量をつけるための研修も大切な課題である。そこでは、「**学習を組織するものとしての学び**」がある。つまり、学習プログラムのつくり方、会議の運営方法、コミュニケーションの取り方などを学ぶ機会となっている。講義、対話、発表が基本である。これについては、インタビューを紹介しておこう。

研究会ではね、セミナーっていうか、研修会みたいに、例えば会の持ち方とか、広報誌をつくるんだったらこういうところに着眼するんだよとか、実際こういうふうに紙に書くんだよとか。あと、例えばそうだな。一つの講座を持つには、こういうこととこういうことが大事で、準備はこういう流れだよとか、そういうのも実際、研究会の幾つかの委員会がある中の研修委員会のようなところで、一つ企画としてやってみたりとか。だから、そういう中で、例えば会議っていうのは、強い意見の人だけを取り上げるんじゃなくて、いろんな人の意見を吸い上げなくちゃいけないんだよとか、じゃあ、そのためにはどんな手法があるのかとかさ、そういうのとかを学び合ったり。

会議っていうのを持つときには、大人数でやるとこういう話しかできないよとか、このぐらいの人数が適当なんだよとか、そのためには、机をこう配置すると随分と話の流れも違うよとか。こう向かい合うのと、ここにいるのとは、違うわけだから。そういうのとかを勉強し合ったりとか、しましたね。それって、結構大事なことだと思う。そういうことを準備していくのは、研究会がやっていかないと、どこもやらないなっていうのがあって。

このように、学習機会を企画する力量とともに、会を運営する仕方についても研究会が研修の機会をもっていることがわかる。それは学習の組織者としての力量を高める機会となっている。

3) インフォーマルな学習機会

以上が、意図的・組織的であるノンフォーマルな学習機会だとすると、市民力を高める学習機会として、単位学級、研究会等の企画・運営を自主的に行っていくなかでつくられるインフォーマルな学びの機会が重要なものである。これは繰り返し学級生たちが指摘する点でもある。

これについても、いくつかインタビューを引用しながら、学級生たちの学びの経歴を描いてみよう。

まず、市民たちは社会学級について具体的なイメージをもつことなく、子どもたちが学校に入学してチラシをみて、あるいは友人に誘われて「**具体的イメージがない**」なかで学級に入会する。

イメージは湧かなかったです。チラシが1枚届いて、「社会学級に入りませんか」ってチラシ1枚で、「こんなことやってます」っていうんですけど、社会学級という名前とやっていると、私の中で全然つながらなかつたんです。一体これは何をして、どんな団体なんだろうという、それぐらいしか思わなかつたですね。

ともかく学級で学び始めるが、これまで学校では経験したことのない学習方法に戸惑うことも少なくない。「**書くことのむつかしさ**」がある。その方法とは、自分が感じたこと、思ったこと、考え

たことを書くこと、対話や議論をするという学習方法である。

で、そこに行ったときに、その学校の学級生の運営をなさってるかたが、「今日の感想を一言書いてください」って。何でもいいんです。面白かったとか、つまんなかったでもいいし、とにかく感じたこと。今日の例えば机の並べ方がどうだとか、そういうことでもいいって。「何でもいいから書いてください」って言われて、そう言われると書けない自分があるんですよ。自分の気持ちを言葉にできない。そう。

対話することだけでなく、自分が感じたこと、思ったことを言葉で適切に表現すること、議論することはとてもむづかしいことである。こういうコミュニケーション力を、わたくしたちは正規の学校教育をとおして奪われてきたともいえるだろう。初めての学習の仕方に戸惑う自分たち新入生たちと比較するとき、運営委員の人たちは、「なんてすてきなのだろう」と憧れにも近い感情を覚える。それだけ運営委員の人たちが社会学級の活動に参加するなかで表現力、組織力を身につけているということでもある。

そうやって1年過ぎて、2年過ぎて、そのうちに、「今度はあなたも、参加するだけじゃなくって、少し企画する側になりましょうよ」って。そう言うてくださったのが、地域にはこういうすてきなかたもいるんだって常々思ってるような人たちは、やっぱりみんな委員をなさっていて。とっても合理的に話をできるし、自分の考えを述べられるし、それから、会を運営する手順を知ってるっていうので、「あ、すごいな」と思ったんですよ。憧れっていうか、ああいう生き方、ああいう女性っていうか、いいなと思って。

社会学級での参加を深める上で、「**受講者から企画者に転換する**」という役割の転換や、ここで「**憧れの運営委員**」がいることの意味は大きい。状況的学習論に即して言うると、実践コミュニティにおいて参加の軌道がどこにつながるかを明示的に示す熟練者・古参者だといえるだろう。ここは大切な点なので、もう一つ引用を重ねよう。

たどっていけば、そうね、社会学級を知ってからっていうところから始まったかもしれない。それがだんだん広まってって、そのうち、自分が運営委員長になったり、それから、いろんなところとつながっていくことで、また視野が広がったり。そして、いつの間にか、委員長が終わったと思ったら、今度は研究会にも自分が事務局員として関わる立場になったりっていうか。どんどん、どんどん一つ一つの遠くが見えてきたみたいなの。どう言えばいいんだろう。イメージとしてはそんな感じ。で、見えてくると同時に、「ああ、あそこに行きたいな」っていうのが出てきたっていうか。

このように、新入生たちにとって運営委員の人たちは目指すべき目標であり、この記述は参加の軌道に関するものそのものだといえるだろう。こうして運営委員になって講座を企画・運営する立場に転換するわけだが、この運営方法として大切な点は、「自分たちで決定する」、ということである。

私にとっては新鮮でしたね。学校のお勉強は嫌いだけど、何か強制されるんじゃないくて、興味があるんだったら自分から進んでいける場所があるっていうか。嫌だったら「嫌だ」って言っていいんだって。誰に遠慮しなくて、私が決めていい。誰かに決められてやるんじゃないくて。それは、とっても当たり前のことなんだけど。

もちろん、それは運営委員が一人で勝手に決めるということではない。そうではなくて、運営委員会での討議をとおして合意をつくるプロセスがあるということが大切な点である。自分たちで企画・運営することが市民たちの学習にもつ意義は、こうしたプロセスを経るからこそ、学習を組織する者としての「責任を自覚する」ということから生まれることにある。一人の受講生として楽しむだけではならないという自覚である。これを社会学級のなかの「役割で考え、行動する」と表現する。

ある程度講師とかが決まってくれば、講師に研究会の役割であるとか、事業の意味とかを伝えながら、講師の了解を得ていただくとか、とにかく人と関わるのがとっても増えましたので、常に私の役割は何なんだろうということを考えるようになって。だから、この事業で必要なことは何で、その中でも私の役割として言わなくちゃいけないことは何かとか、そういうことは、考えるようになったと思いますね。

学習を組織する者としての責任を自覚するからこそ、「自分たちの力量を高めようとする意欲」が育まれる。それは、考えていることを適切に伝える努力にはじまり、学びつづけることの必要性が自覚されるプロセスである。

だから、どうやったらその人の心に響く言葉でしゃべろうかなとか、ちょっと大変なんだけど、難しくないように伝えるにはどうしたらいいとかさ、そんなことばかり考えてた気がする。

会長っていうのはこういう役割。だから、あそこに座ってご挨拶するだけが会長じゃなくてさ。それも一つの役割かもしれないけど、いや、違うんだって。やっぱり会をそれこそ継続させていくためには、常に新鮮じゃなきゃいけないわけだから、そのためには、やっぱり常に吸収。新しい情報っていうのも必要だし、これでいいってことはないっていう苦しさもあるじゃん。どんどん、どんどん水をきれいに流れていって、人も育っていかないと、会は老朽化していくでしょ？

そういう人たちを説得する、納得してもらうためには、私自身がしてないと相手を説得できないですね。だから、そのためには、やっぱり怖いっていうのもありましたね。自分が勉強してないと怖いっていうのが、物を言うのがとっても怖かった。だから、怖い思いするんだったら、勉強して、いろいろなどこに出掛けたほうが、気分的に楽っていうのがありましたね。

もう一つ大切な点は、こうした協同行為の積み重ねのなかでメンバーのなかに「信頼関係のネットワークをつくること」それが幾重にも広がっていくということであろう。

つながりっていうのは、言葉を換えるなら信頼関係かな。お互い相手を尊重し合って、信頼する。イン：ういうのは、どうやって作っていくとか。佐藤 そうだね。理屈じゃないね。一緒に動くことじゃないですか。それぞれ一人一人は自立してるわけだから。だから、つながるっていうのは、相手を尊重して、しかもそこに信頼関係がある。で、その中で、くっついたり離れたりっていうか、一緒にやったりっていうような。それは、やっぱり物を食べたり、しゃべったり、どこか行ったり、行動したり、何か一つのをみんなで作り上げたりっていう過程の中で、一人一人が、その人との距離っていうか、分かってくるんじゃないですか。

4) 社会学級から社会的活動へ

社会学級を経験した人たちは、次のような学習経歴を辿っている。まず、あまり具体的なイメージもなく子どもの小学校入学をきっかけに友人に誘われて趣味的な学習をはじめ、学級運営にも参画するなかで、学ぶ意欲や社会的関心を広げる歩みをたどっていく。とくに、学級運営委員からブロック会役員、社会学級研究会役員と経歴を深めるなかで、社会的実践の力量を高めつつ、学級を運営するものとしての社会的責任を自覚するプロセスがあったことがわかる。

こうした女性たちは、やがて社会学級を巣立っていく。ここが社会学級の運営のユニークなところでもある。大変なことではあるが、役員は持ち回りで、任期を終えると必ず新しい役員に交替して行く。そして、さまざまな社会的活動への実践の場を移していくのである。

たまたま社会学級に入って、そして研究会に来て、その方と知り合って、同じ役員をやった方から声をかけてもらって。なので、きっかけは社会学級ですね。入らなかつたらボランティアも知らなかつたので。

このとき、先に述べたような共同の活動を経験するなかで育まれた人びとの信頼関係によって結ばれたネットワークが大きな意味を持つ。

そうそう、わたくしもそのなかの一人。それから、研究会を卒業してからグループをつくって、自分たちで。研究会って、割と総花的なテーマで活動してますから、そのなかで自分たちが関

心あるものに絞って、それに一緒にやろうという志を同じくする人たちで集まってグループをつくろうっていう、大体そのながれがあったんです、研究会の。

ここで、どのような社会的活動に結びついているのかを紹介したい。

そうですね。女性の体と心とか、性の問題について、研究会の中で私たちが特に取り組んだのが、いわゆるジェンダーの問題だったので、その中には女性の体の問題とか性的問題ってすごくあるんだけど、割とタブー視されていたから、中でそんなことを話し合うってこと、あんまりなかったんですよ。でも、ここにすごくジェンダーの問題って凝縮されてるんじゃないかっていうふうに思った仲間で、グループ・アイという、いわゆる自分の体は自分のものと。私の体の主役は私ということで、グループ・アイというグループを立ち上げて、ずっと活動してきました。で、ここが拠点になったんです。

ジェンダーをめぐる活動である。このほか、仙台市では、さまざまな審議会へ委員として登用する政策をとっていることもあり、社会教育委員、教育委員のほか、多くの委員についている。この女性は、その後、公民館運営審議会や教育委員を歴任するとともに、イコールネット仙台というNPOを立ち上げ、市民活動を支援する活動をしている。

もっとも多いのは、次のようなボランティア活動への参加である。

上杉のほうの社会学級の元委員長さんたちが今、やってらっしゃるんですけど、「障害児（者）を守る会」っていうのがありまして、年に3回、運動会と音楽コンサートと作品展をやってるんですね。そちらのほうのボランティアに参加させていただいて、各小学校の特別支援学級。鶴ヶ谷とか、なのはな園とか、県のそういうところの障害児のかたがたと、そういう作品展、運動会、音楽コンサートをやってる。そのボランティアのほうを、高橋（仮名）さんに声をかけていただいたんで、一緒に参加させてもらってます。結構、社会学級生の人が多いんですよ。

ええ。私が会長のとき一緒にやった事務局の人たちとグループを作って、自主グループですね。自主学习グループを作って、「カオス」っていうんですけど、それから、前から自分のうちの周りで作ったグループがあって、「なでしこ」っていうグループなんですけど、そういうグループで活動していました。あとは教育委員でしょう。で、今でもグループはあるんです。

次々に自主的な市民活動を立ち上げ、卒業生たちへ参加の輪を広げていく様子が理解してもらえたらう。こうした力量は、個人的な技術や知識というものではない関係的な力量であるという点が大切な点である。学術的にいえば、社会関係資本のもつ力であり、運動論的にいえば、資源を動員する力量である。これまで述べてきた社会学級の運営だからこそ、実現した基盤であるといえよう。

研究会からは卒業してるわけだからね。研究会までは、場所も提供してもらい、ある程度の資金ももらってだから、保障されてるけれども、グループ立ち上げるって大変なのよ。結局、自分たちでお金も出し合わなきゃいけないでしょ。活動費も自分たちで出し合うでしょ。場所も探さなきゃいけないんだよね。…だけど、立ち上げるに当たって、研究会や社会学級で学んだことがすごく生きてきたっていうのは、ありますよね。物の考え方もそうだし、立ち上げ方も分かりますよね。場所を探すにしても、ここがフリーで、誰でも自由に。ここは、男女共同参画って、まだその前だから「婦人文化センター」っていう名前で、女性の地位向上を目指す施設でもあったから、ここがちょうどあたしたちにとっては格好の……。インタビュー：ちょうどいいですね。うん。で、先輩たちもここで活動してたから。卒業して、グループで立ち上げた人たちは、みんなここで活動してたのでね。だから、ここでお互いに情報交換しながら活動してたんです。

こうした仙台市の市民活動の担い手を育てる重要な機会として機能しているところに社会学級の意義がある。

若干のまとめ

以上を要約してみよう。

社会学級に参加することが、なぜ、市民力を高めることに結びつくのだろうか。それは、現代的課題を学んだからではない。ブロック会や研究大会で、より高度な知識を学んだからでもない。自主的に全市レベルの学習組織を運営する力を自らのものとするプロセスが大切な点である。学級生たちが、自分たちで自主的に企画し、運営していく。このプロセスで運営委員同士の対話が重ねられていく。多様な意見がだされ、その意見の相違を理解し、それらを調整しつつ計画をつくることが大切な経験となっている。

それは学習を組織するものとしての責任感とそれを支える知識・技術を高める機会でもある。かつてあった課題別学習会では、現代的課題に関係するテーマを運営委員長たち同士が年間をとおして学んでいくカリキュラムをもっていた。これが共同学習の場としての機能をもっていたわけである。しかし、より大切なことは、社会学級が基本的に自分たちだけで運営をしていく組織であるという点ではないだろうか。それはたやすいことではないが、この共同の行為をとおして学級生同士の信頼関係に結ばれたネットワークがつくられていることが重要な点である。知識を学んだだけでは、市民の行動に結びつくことはない。

この点、見てみたように、社会学級の卒業生たちは、社会学級で学ぶなかでえられた関心と、社会的動員力を駆使して、さまざまな社会的活動に踏みだしていたことがわるだろう。そして学習から社会的活動への移行に際して、共同経験を積み重ねるなかで培った社会的信頼のネットワークが大きな役割を果たしていたことも見てきたとおりである。

現在、仙台市では市民センター（公民館）で学習プログラムをつくるのは職員の役割になってい

る。結果として、市民は、この講座を選択し、受講するという役割に参加がとどめられる結果となっている。これを改革すべく、「市民自主企画講座」などの事業がすすめられているが、社会学級では、こうした性格をもつ実践が60年以上にわたって重ねられてきたことの意義は大きい。

4. 社会学級の現代的意味

1) 仙台市の社会学級をめぐる現状

これまで見てきたように、仙台市の社会学級は、戦後すぐ、社会教育施設がまだまだ不十分な時期に、アメリカ政府の影響を受けた学校教育の開放という制度として、かつ、自由主義の理念のもとに、市民たちが自主的に運営する組織として出発した。したがって、学級では、参加と民主主義を基調とした運営方法がとられている。これは学級が歴史的に継承してきたすぐれた特徴の一つである。

ところが、この社会学級は、現在、日本のほかの自治体ではまったく消滅したといってよい状況にある。1960年代以降の社会教育の制度化のなかで、社会教育施設としての公民館の整備、専門職員の配置がすすむとともに、学校開放の役割を終えたと考えられたのではないかと思う。この結果、市民自らの自主企画・運営する形態から、職員が作成した講座を受動的に受け取る関係へと変容をとげている。参加と民主主義の形骸化が進行したということができよう。

こうした諸要因は、仙台市の社会学級運営にも影響を与えざるをえない。実際、学級数は維持しているものの、学級生は減少の一途をたどっている。かつて学習の中心であった問題別研究会など自主的な学びの場を維持することも困難になり、より簡便な運営に転換していることも事実である。

しかし、社会学級の組織・運営形態、そこでつくられる学びの構造は、市民のエンパワーメントを図る教育的実践方法という点から、以下の現代的意義をもつ。

2) 社会学級の現代的意義

第1に、すでに述べたように、社会教育の実践は、民主主義や社会正義を実現するという目的をもつが、いうまでもなく、この目的・価値を実現する活動そのものが、民主的でなければならない。この点、社会学級に即して言えば、学級への参加、教育内容を決定する自由があり、参加者同士の対話による合意のもとに教育実践がつくられ、活動がすすめられてきた。それは、学習をとおして市民力を育む条件でもある。熟議による民主的な運営が大切にされている。

第2に、市民力を育むということを考えるとき、公的教育をめぐる矛盾がある。だからこそ、教育行政の役割は、特定の教育価値を設定することであってはならないのである。教育は支配の手段であり、教育というよりは教化に変質する危険をつねに内包しているからである。社会学級では、あくまで学習者が自主的・主体的に運営することを基本としており、行政の役割は学級運営の支援や、プログラムづくりの方法、会議の運営方法に関するものなど、運営委員のエンパワーメントの基盤のための学習機会の提供にとどめられている。学級の運営の責任が市民にゆだねられている、これが大切な点である。

第3に、社会学級がもっている学習機会の構造の意義である。ここでは単位学級でのニーズにも

とづく学習にはじまり、社会学級セミナー、研究大会など重層的に構成された学ぶ機会がある。もっとも大切な点は、ノンフォーマルな学習機会である共同学習だけでなく、運営をめぐる協同活動をとおして実践への参加の経歴を深める仕組みがあるという点である。それは学級生同士の共同行為のなかでつくられるインフォーマルな学びである。成人教育でもっとも大切なことは、このインフォーマルな学びを活性化させる公共空間をつくることである。

第4に、学習から社会的実践へ踏み出すとき、これらの重層的な協同活動の機会をとおしてつくられる全市民的な人びとのネットワークが重要な資源となっている。協同の活動を経験するからこそ、信頼関係にもとづくネットワーク、すなわちソーシャルキャピタルが形成される。これに対し、講座に参加し、講師の話を聞くだけでは、それは個体主義的学習の方法であり、こうしたネットワークは生まれることはない。ソーシャルキャピタルこそ、社会学級を修了した人たちが市民活動に参加する基盤となっている。だからこそ社会学級は、市民活動のインキュベーターの役割を果たしているのである。

研究会の役員を卒業すると、一般の学級生に戻るようになるが、同時に、NPOなど社会的実践への参加へと一歩を踏みだしていく。これらの仕組みが、学びと実践とのサイクルをつくる秘密なのである。

【参考・引用文献】

高橋満, 2009, 『NPOの公共性と生涯学習のガバナンス』東信堂。

横石多希子, 2004, 「エージェンシーとしての女性と学習—『女性問題学習』論を越えて—」, 高橋満・横石多希子『ジェンダーと成人教育』創風社, 25-57頁。

仙台市教育委員会, 「平成26年度 社会学級運営のてびき」

仙台市教育委員会・仙台市社会教育研究会, 1980年度-2013年度, 「仙台市社会学級研究記録」

Biesta, G.J., 2006, *Beyond Learning: Democratic Education for Human Future*, Paradigm Publishers.

Biesta, G.J., 2010, *Good Education in an Age of Measurement: Ethics, Politics, Democracy*, Paradigm Publishers. = 上野正道・藤井佳世・中村(新井)清二訳『民主主義を学習する: 教育・生涯学習・シティズンシップ』勁草書房。

Biesta, G.J., 2011, *Learning Democracy in School and Society: Education, Lifelong Learning, and the Politics of Citizenship*, Sense Publishers.

Lave, Jean, Wenger, Etienne, 1991, *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press, 1991. = レイヴ, J / ウェンガー, E / 佐伯胖訳, 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書, 2003年。

【注】

- 1 本稿は、2014年7月に行われた韓国ソウル市招請による講演会の原稿に加筆したものである。執筆者高橋がソウル市長と会談した際に仙台市の社会学級の仕組みを紹介したことから、この講演会が企画され、その後、ソウル市生涯学習政策のなかに位置づけられようとしている。なお「3. 仙台市社会学級で実施した学習内容」を朴が、それ以外の章は高橋が執筆している。

- 2 だからこそ, Biesta (Biesta 2006, 2010) は, 教育の主要な機能として, 資格化(qualification), 社会化(socialization), 主体化(subjectification) への貢献をあげ, かつ, 主体化のためにユニークな存在としての現われを保障する空間や場所の質をもつ「中断の教育学」(Padagogy of Interruption)を提唱している。

The Mechanism of *Shakai Gakkyu* in Developing Active Citizens

Mitsuru TAKAHASHI

(Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

Hyunsuk PARK

(Assistant Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

Hiroki NAKANO

(Teacher, Miyagi Prefecture, Matsushima High School)

This paper is a case study of the “*shakai gakkyu*” in Sendai City of Miyagi Prefecture which now can hardly be found in other self-governing bodies countrywide. The particular class has been disappearing in many self-governing bodies despite of permission granted by the Social Education Act. The reason of focusing on the class is that citizens who used to be learners in the class tend to become active in civic participation, such as participating in policymaking as members in the deliberative assembly of city administration and playing key roles in NPOs, civic movements and social corporates. In other words, the in-school adult class seems to play a role in developing active civic and policymaking participants.

Why has the in-school adult class been able to empower women to be active citizens? This paper answers this question by investigating the mechanism of the class. It details how it works and what learning contents and activities are involved.

Keywords : shakai gakkyu, learning by women, empowerment, joint activity, democracy

